蕉村遺稿

全

吳春寫

江山一望淡生春晴日
百禪稲粉
頁能大子周り七
歩謝母石村
明治三十年　章迴為去

芋村遠行

毎日うすうら師や福寿牛
うゝひすの枝ぬみて原す神寿代
芋や畑をち小ゝる牛の中
をち手原うゝ芋をうるうををる
うゝひすよ酒ちの方をく猫の人
当方方の芋方
筆ようゝひす峠や峠やわれ時
うゝひすの峠やあう向ちら向
芋や時中乃墓の牛方芋
柿本町うゝひす面うゝ元去ぬ
うゝひすハやも宗任う神寿代

うぐひすや梅の蕾をとるれうね
鶯や梅のみちおりてのり　盤
うぐひすやつるの星の星をとれ
春あつてうぐひすむやゆるしに
わう病のうぐひすん時をとる
春あらたなるつぬひとるかな
一雨をまつる梅の春
梅のあるしうぐ
梅の花の春
きしうぐを畠すやそ梅ゑ
水の春をむるつぬ中春の梅
うぐひすのあためきたるや梅の春
野遊の梅あるもあるあ

風の吹かるしや梅の風
名梅やつるれそるし　仙たる式
梅やゑ入日の鶯ふれうしは
梅うぐの立のうぐやゑ春の暮
春をうぐをむる梅の春うぐ
雪解　や時うぐ巨　暮る星夜うた
池回うぐ少原をれしまの春さ式
をうぐをあるるる梅ゑ申
やゆうの病ふ梅めのそうぐ式
中の入や暮よめてうぐ男　山
雁又入をちれるあの世義式
曉　月太海をうぐ春毎式

おかるる月はたちかへるみやこ
月おもかるこころ神の御名の
不二おろしさえかるゆのさと
柳もやうきあ樂おろ恵
門柳の姫うけぬ
風吹うぬおかるものたちき柳
やあるきうらの日のうれうる神名
春風の住まうしたり春曙おも
春風よ花の若和歌の笠の白
小舟うて伊勢江るや春の水
るうれまうたるみもまの水
湖や堅田のうと春の水

里人とハ鶴はたうれ春の水
春のあるみれはたるをぬらぬ
夏舟ヨ初めうせたうる春の水
るうれまうたるや春のあ
春雨や蓬春たる 漳
春雨ものれうる花の山紫
池と川たうるうぬ春の雨
春雨やかたのの七日をあるたる
春雨や岡車のあるさめたる
たうるめの中と家うて大はうか
菜ヘ家へうたしうやや春の雨
春雨よるあ神陳の住ぬ

まろかりぬらち唐鳥の背中かな
まろかもや蛙の腹はまろくぬれまさ
春の雨宮一のあるはたまりけり
羽騒ぎとまりてねむるこてふかな
目ざれしまろや昔のおもひかな
まろの夜や孤の讃ふ上　童
筆字は香焼くまろの夕かな
まろの夕ちの踏羽織こそ梅の花
桔梗さへ咲るの名もあかしけり
秋そろく水や田螺のかくこてし
すゝきや我名さへそ苔したし
畑うけや尼同人のへそくさるぬ

畑打の目まろうかれに摩耶の嶽
すゝきや耳さへときの唯一人
畑打や峯の院坊の鶏のなり
菜畠をきつせるさかり梅まかな
鳴まろやみそあそそなり
打まてるりゝひ洞れてそれ候し
妙寒てたちかるはぬのいたきかな
山蜂や未九夜の白の中
出丹や蜂子掃ふみするれ棹
花のまゆ丁の足あとらあかりぬる
打うけや居の足あとまゝあのまろの水
雉鳴やまろりまのめの鳥　白山

きし帝や吉野宮きさらぎの昔　扇
阿国女の宿りのめりや雑の
神きくまをまのまりあ浦る蕪
姫ためりて金の間をなる蕪
元奥をるるるる子首るはをめ式
イめををををもはゆういはる分
法蓮や石巻まるあをあのまをる
桃のをむをるや任に去をのち
雑のけりまいめきか枝のるる
おろもまをを蓮の蕪や城ひる分
葉の花や皆出掛ひしをを舟
なのるれや去ひとしきはの蕪

葉の蕪や油を麦小麦のうち
不の花や法ばるるるをを
なのの花やををむ原の尾上まて
葉のをや摩都とれを日のを
さとしを栗蕎をしめぬふる蛙
飢をのを踏おをを山ととん
蕪ををれぬ我住む京す帰を来
桜ひを来をる蛙首るけをむ家
人間る蕪をや山ちのら
法補いの蕪をを代ゆを鳥帽子式
を乙戸丹波の鬼のををを桜
四方の冷飯をををををを

下やしき信濃の花し降りつ
る紙ゆきをまつ桜式
花ま雪をまつ桜式
きしくもるき蕊うち
花ま雪ぬぬり山桜
みしゆまを鶯とはたる堀系
花さ多つ六陸花乗又ぬ日るき
うり雨ま雪いうまを花のあるし式
馬ちりを桜の桜又花ちり
紙や鑑や花ま香佐ん仲むしら
桜末のひら葉ま又ま雪や走桜
又ま雪ま雪ま雪や走桜式の花雪

桜ちる前代水や星ちる秋
きのう蔵を刺ある仲のんぶく
月ま蔵ま蔵かるる花やち里伯
むきる秋石山の桜ちりる秋
ちる六桜花ちる花のゆつる系
ちりるみる花代もの桜ち系
鳥帽子桜を仲ちる秋式
蔵ま月といるる秋ちる壬生金仏
逝きるや蔵中ゆる京のまみ
逝きるや中をるゆるちる系
月ちれの月や山ちるのおとしをし
月ちる花の色春ち系

石工の指や[illegible]
大原や郷踊の中[illegible]
[illegible]
大門のおもき[illegible]
石風呂の欅の[illegible]
[illegible]向[illegible]
山[illegible]の車いろ[illegible]
[illegible]
いと[illegible]
[illegible]
おき[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]春や[illegible]
[illegible]
[illegible]をしむ人や[illegible]

夏部

更衣いつ[illegible]
[illegible]七[illegible]
[illegible]
二十五のあ[illegible]
[illegible]

文衣帯子の恩のおもさこの事
おろもう人も五人のうちにて
更衣相女の眉毛いろ多あき
文衣きうちう柿ふ紋の密
袴きて多い世くるあるそひく
をしおろきき女嬬の憂や牡鶏
五人ろう男の子都りの内
おとを吐てひらうんとする牡丹
みしうおのおの同るさうるんく
吳牛もうう捨てぬおの牡丹く
花ろうそうそうれうきあや宇多
梅ろう梅ろそれやくんこうう

ろう密みてあうもあうて宇多
金陽ろもとおもきしうんこうう
おろもるく見ろそうきあや宇多鳥
ろ不捨しうろ色ろ帝ろうんこうう
鶯鼓ろ赤の同くうやまれろん
うんこうう昨ろもうまう帝ぬる
羽いろも花ろそのたうんこうも
宇ろうう相ろもまも振ろふ
みしうおや金ろもうるさぬ振つき
明やうきおや稽書鞠ろう
みしうおの間ろうう古井川
鉦おやおろひろうぬ夢の先

みしうの花や昔の人の墨堤
ちらちら花や洲崎のうら月一行
山吹の花のもとゝ浮やゝ花いとら
金の間の人くものいとぬる菜哉
やとり木の月を宴しなるわら葉哉
夢見よあの世まつ宮やまる相
涼ゐ月とりつの中のわら葉哉
蜻の菜屋の仕士飯をまる葉哉
出京して秋ゝ寸里のまる松葉哉
葉稲や墓石ゝまるゆくまる葉哉
岸根り帆八わそらしきまる葉哉
筍や椿を惜む坊の外

青秋やなる鶏の鳴くまで坊の鶏
麦刈をとりてせもと麦の芽
麦うゝよ利き鍋もとゝ麦の芽
麦秋やひとゝ稲ゝ麦の芽
飯盗む狐ゝ長ひとゝ麦の芽
狐や五月晴の畑の芽
芋ゐさめてあるやとひらく一本新
朝すゝの芋朝の口あるゝ
木のたるよ朝の口あるゝ
麦稲よ寸ゝ蓮や見の寸ゝ
さし汐うゝ日の洲江の不ゝ
さみゝれや美豆の稲江の不ゝ

きみこれや名にもあきの川のあさぢを
山おろし早苗とりまぜ
こわくせて蓮生坊の田植時

鄙の湖

藻のもや蓮ちかく鄙の水ぞなれ
佛の御のぬきもたつや蓮のもと
蓮池の田風よしらむ苗ぐ
戸をあけて蛙鳴く蓮のうへ
蛙年年おのおの角の蓑みしら
蓑虫ふちくもの帰を蛙年
苔やいほの半ばの鶏舟夢を見
わう宿よりの高なれを男舟

かくしたいくも茶の花はかりこそ
動くなをもてをあそぶこそ
とくとく波をふしの流やこそ
花の実の水まちたりこのむこそ
こそ山やこちたしいてろろ川
いとかなる料理なるる土用丁
花のりの炭花豚やこの半
曙世まくなまとやこの時
この時の肘ちの酒をまの
任口名き国をまのらせん
波の花の花ちれ貝の国を
恵わくらの金花武士の扇

眼まなこ疾しと雖いへども

主あるじ忘れぬ前まえの酒宴

深夜毎に舳に立たる寸

列子弐

菖蒲やあやめ入れる水の清

石菖の不老なるを楽しむの身

度々のそこらをゆくやうのそ

賊毎をそなぬ清船やうるの身

水昌の四路わけまく佐みち

石工のたゞ人体しみ佐みち

しらたまやしらたまぬみ

鳥まれに水きたるとしの

わらう葉まそたいて時のまぬけく

ひらひらと蝶のもろ羽や比枝おろし

ぶるひたる松の上の蝶やうるか

いさらをも蝶をそうれん伊深そ

蝶あしき蔭の志の蝶やうるか

いさまみきをまの暮うるうやうる

雨まもゆる新緑うやの蝶をそ

蝶をの中に蝶身蝶の四仏うか

一日のうちも蝶をのうるうか

蔭をの蝶のうるれをうる蔭利そ

無うるまの方将風をわられし

わうら柴の橋あゆうる更うる

そうまあうそ比異天の巳乱や牛蛙人

[illegible]
夕点や武士ひとしおの裏つき
四つ[illegible]や外[illegible]
末業の[illegible]

[illegible] 桜川

秋

温泉の[illegible]
[illegible]の秋[illegible]
めぐる[illegible]
硝子の奥おく[illegible]
うちもしして[illegible]

[illegible]川より[illegible]
[illegible]
魂[illegible]王孫[illegible]
徹書記の[illegible]
北[illegible]
孫末の門を[illegible]
看病の[illegible]
あ[illegible]
銀閣[illegible]
[illegible]待や[illegible]
[illegible]
[illegible]入や[illegible]

二ゝ折たゝみ入しゆゝ旅の人
いふ妻や活もたゆめる秋ぞしる
鍋 金ゝ
稲妻やこゝかしこ 鈴 澤
いなづま妻や秋山を指のゝ舟
いなづま妻や伏海なたらしき舟
むせつゝゝゝ漂うまきおる戸
物 衣の袖よ栗拾ふ 夜こゝろ
故 男の中たゝまや角力取
ゝき角力ゝてまぬ 志の根氏
初角力の草よたゝまや 稲妻
訪 ひよ栗一角力ゝれしき 物ゝ

角力元性もゆの小柳をこうの花
ちゝはきの角力よ蓮ひぬ鋪ぬ
ぬゝたつゝゝきゝ名生やゝゝ名
白雲やおおかわゝたゝ雲のゝ
鍋 釜も少のしきゝ花やゝゝの雲
舍 利ゝゝゝゝ月の軽紅や叶の雲
篠 うけや雲よあゝゝみゝゝし
指 人の中ゝゝ秋の雲
相 の栗ハおゝゝゝ芝蓋
俳 理窟の面ゝ木 僅ゝ
俳 ゝ者の径ゝ指ゝ
ゝゝゝゝ一把ゝ

蕓香や芭蕉の葉の二ツ三ツ　寺
うき草や小舟の棹のあとをぬむ
墨の衣を画むしろ盛るや秋の雨
蕭々として主因橋ゆくわれら
秋たまくたしこれぼく　志賀里
華々と夢ふとしとなれ見や秋の庵
三方物風のうらに菖のうら撥ふ
花の香刈のうらこそふあらうとす
地下りよられ山の花ふ
追風ふ花うらうる菊こう事
てめあつぬ尾のゆうしくを赤とを
蟬や相如の琴の時

秋の故の人を尋ねうまうつこう
蓑虫や笠置の寺の蕎麦の中
うしろ小峠　袖ふるたらしきちちを
か長川のかしかふ和ちを郭人
田ふおちて田ふとふたうや秋のふ
秋の雨や我芝蓑ふまたぬらさ
秋の雲時日やを佳を敷ちたる
おもしろを砂はたふ偽を秋の風
秋風ふうやを辛所窩の鶏屠
十六夜の雨ふ吹生ぬ秋の風
ふうて住かしうう寺の秋
唐来のおとうきやをし秋の風

[illegible]や画よりも書くに夢の人通り
雪をもれて[illegible]の所きのあるう
人をもとめ難ハこのしこか雪の跡
まだ雪や女あるしるめ有
雪見あるる村ハ更てもうりの月
盗人のそそ欲[illegible]なるもしりるの月
月の宴科[illegible]のこるきこる
五六升芋若[illegible]坊のうれ
三井寺や月の清[illegible]
名月やをろぬきぬふるるの
十六夜や鯨まそめし熊野[illegible]
水の月やらゆる雪うとも

六の二日きめく時ぬ陣こる
若人の国よりたちぬく鳴る
花まと拾ひ[illegible]たれこる
ふつうきこ五の里のきぬる
雪ぬうきこ彦[illegible]拾る
うけ稲よ嵐のたくつ田こる
かけ稲のそら解しかう坪の雪
稲刈れハ小ぶるの秋の日のあたる
きるかよ稲[illegible]ひゆく拾ふ
中うよ彦稲捨ふ[illegible]と姫
畠ぬし来るし[illegible]て戻り
稲うれハ化をあらうすかしこる

花鳥の彩色のさいすまの色の
折たき寸秋の行む雲山の
錦ちる時のまとくとかしこ
笠られて面目もなきまとまの
船頭の棹とられたるみちうな
鳴の巣の洞代まかくるみちう
時分して蕭の月の
暁のあれ棹のたつのうきく
また二つ尾の
関のちもとせに減るみちう
西行庵を通るみちのあしたに
妻もなきも寺てものぶるみちう

慈みき帆柱春うたてうきく
笠なのうのき四わしやおとと水
蕭し水柳のうとくまとくまうう
古寺の唐柴のとくまとくまの
沛国もう蕭の道や蕭 撥
うたくしや時のうのとうかし
蕭麦刈てのうとうや我中くたのうた
棹の浮うたやう吉野の蕭春畠
曼珠沙花蘭のうたたて 撥 峠
徒歩の門もらうの茅かり
下蕭のの萩うもとや蕭の
黄の曼八何の花そも蕭の中

萩の穂くと土器引て花すゝきかな
松明消て海すこし見ゆる花野かな
猪の月に啼音やうら枯れゆく夜かな
猿ほえてしろめたさこそ旅の月
鶉鳴て宮まゐりするり林藤かな
鶉おちりて焚火ゆかしき宿の里
鴫のうつらへ啼やもはきしき
鶉のこゝかしこに宮のあかき
萱猪や似雪ら鍋の煮物らら
桜き人おゆ葉しとり蘭の花夕
蓮風はときハを吹たし鹿の声夕
みのむしの鳴くも似た鹿の声夕

小男鹿や鳴らぬも神柱
りまのとらい集て
みよう〔せ〕とゝいろうる
猪の猩々入や鹿の声
鹿鳴や雨の夜暁のたつ
たち笑の心地さらそそれ鹿の声
山寺の夜お松鹿の声
宮の灯を山つたひせそ鹿の声
されハこそ物ふかく浮まし野芝
秋の松の夜をは啼の聲のえうか
探題　塘
住むうれの秋の夜をもくれ行かな

秋の秋や言ふもむなしき仏かな
手燭しるきみちんの木の葉哉
巫女よ瓶を出こそる木の葉哉
書淀の師の鼻あきの秋哉
芳燈の油ぞ冬の秋哉
ちるかたきて新蕎麦の秋哉
蕎麦屋の仏をきくもむなしき秋哉
不きこと二ちとせ黄菊哉
半樹ちる所黄菊哉
白菊や白菊の香の香哉
二ぢ法の菊まのちる仏哉
菊の香や菊の時きわたる

さの蘭や五月雨ふる時ふる
梅もちるきものもしと梅ちる
梅岸の小寺ぞるし梅もち丈
升飯の僧ふるぬ梅ふる
月の月ぬきくとふ梅
月のちる鳴つあるの水の中
ち井寺る紙の秋ちる
萩の風いちの秋ちや月の月
芋ちも漁ぞ男哉
蕃や老木の柿の秋
柿の葉の寺をくちきぬ蕎麦畠
秋の雨ちひらめるる石のう

祇書蹟をまつるよ嵐の下山哉
黄さそみし楮を山のたちまちぬ
おりくるゝおれふきてしも様ひらき
おのもら葉かのも色しらき紅葉哉
山くれて紅葉の朱をうはひけり楽
紅葉つくる山石まみゆる蹊ゆかな
もみちくや田毛かしこき筆二本
さびしさの蛛の糸もありて秋のくれ
人はなほ化るもしらす秋の暮
訓読の旅をとらせや秋のくれ
一人来て一人をとふや秋の暮
うきありある今下のひとや秋のくれ

門を出て故人にあはぬ秋のくれ
鳥さしの雨いる庵葉秋の暮
戸を叩く狸と秋を惜みけり

冬之部

簑虫の鳴らむ世をうらめしがる
みきをもえてたゞのしらまし
枝をもれてはつるの月の葉落ら
目前を昔に見するしぐれ哉
納人の枯のまちてえ夕時雨
化されて筆持たる寺の時雨哉

鷺ぬれて鶴に日のてるしくれかな
禅林の廊下うれしき時雨哉
たえしの雨ちまつのひさし神時雨
紅葉の茂いはまや夕しくれ
鼓鉦 時雨
あらの江まねハ時を告しくれかな
まさら路の作ち日くらす時雨かな
しくるゝや長田の館の風呂時分
もの書て黒田く時しくるゝ
蓮かれて池あさましき時雨かな
半江の斜日片雨の時雨かな
茶筅を捨るところ光落葉哉

屋根葺の落葉を踏や里のこう
兼ての乞しなる掃る落葉哉
磨臼のおいろつゝ落とゝ落葉かな
落葉して遠くなりけり臼の音
青苔の魍魎ちき夕日かな
みえされて蓮の美尺か皆紅葉
枯尾花野守か鬢にさはりけり
秋去ていく日になりぬ枯尾花
三日月も罠にかゝりて枯野かな
白露もなくて悲しき枯野哉
石に詩を題して過る枯野かな
こからしや唐紙よとうして吹都うら

あらしや耳はのそと始みわたる
風やのそひて流れて剣のいろ
耳のうき瀬をさみ叔るや君の鮭
松浦振りて舟揺れ□る我の君
我骨のうらんきてる君叔ゝ家
初霜やうらふや庵と亡さくる
真金くらむ氣の兵の名なし
雪舟の不二雪信の佐せつれ
多く之不儒せんとひまるゝ家
口あの棒も飯のりうと家
口あや楢ゆうしき帰とさ案
口ゆや北もまられて四尽雪

蚊ひらきや袁町けて角力髪
鬼王ゝ妻よばれし金銀ゝ那
嫌ひ又氣のかぶ香ふすゝ家
うき浦圓宗祇とあはされしき
孝行家供見てふらん姫ゝ浦
宿老の我の肩や朱ゝ抄
みゝやさらしと袋衣ゝ桑
晴の秋うに中をなすとき弐
露の圓秋て糸くよ巾ゝ出
財ゝ遠ゝひしき之巾家
埋やもの年うにぬ比丘比丘尼
埋火やまる消ゝ秋やいゝ流

うたみ山も我名をとゝまるかな
火桶炭団を焼るの哀ひとしほ

悼　夕顔

白炭の骨ばかりやはかの雑
旅立や白ゝ白ゝ雲の中
孫よはかを哀の帰る郭公
ゆくと庵をさせる雲や梅たき
墨漆の哀の錦やちるもみち
哀哀引の枝ひしきたる秋
又机の枕も小春のひしきうち
ち雪と雪とあり月東風の亡さしの
ち雪や上雪ゝ月ていりおもす

雪雪をとゝ分んとすれハ氣ゆく
雪西や根たのもきか哀ちち
雪ふる雪ふる深雪うち申
雪ゝ戸ゝ格をあてゝ未履哀
雪の旦母哀のゆめたきも
雨の内貧しき蓑の雪ゝとめり
未冠町を旅人ゝ雪の紅
住吉の雪ゝぬ拍めうゝ
郭郎の市ゝ敏ゝ雪のあさ
嵐雪ゝふゝん雪の宿
乐書の磨をとあれむ哀の宮
繁ゝ雪一刃のゆみうゝ

鴛鴦やまはの岩も錦華し
鴛鴦や花の君子ハかれてのち
水鳥やてうちんひとつ渡とまる
水鳥や夕日ばかりは入る頃のひ海
千鳥や巨椋の舟に来添ふらり
水鳥もみえぬ江わたる寒さかな
佐保川に鴨の毛捨てゆくつらさ
鴨寒く漱ぐさゝえぬうねかり
織浅ふ水のねかりや鴨一羽
浦みな鳥も来て寝るき松
わたし呼小女の声や小松ちどり
あひとうまえ茶落葉やクてらも

みさし妹やもる恩しく来ても来まさ
みるまと家のはうしき枯鹿のふ
里の暮て江の鳥なしみるあらきち
萬浅ふ淡もちりし井手の里
府儒者蓮の美喰ひに探
なす坂まも城ちうむる書きた
桂衣乃妻もこもれりうすり喰
玉川の名口をきとむ飯乃夜
飯汁の亭主とえてとゞ食
雑の飯くせかへめそ揮されさう
海のあき京おそろしきかなとけ
飯汁の君に我おもて子朝伯母

何豚汁や五度の寒の戻り哉
餅けやおのれハ猫ゐる
通ひなぬ道思ふ
その昔ゐ何会君の座や餅やあき
雪月のそのやハ月ハ餅ハるし
餅とけ昼ハ柳ハ桜哉
山おろし一二の鉢のかりうす
まえまやせんとゐりひ寺餅舟
已ゐ丙し餅ハ近を月ひとつ
みちゐもう元のうのとしの山
鶏ゐ文ゐ山寒ゐ集ありみちゐ
みちゐも案書あゐもてゐゐれん仏

杉ゐて死ぬ人もあ案みちゐ
桃源のひちの神さもみちゐ中案
夢ゐ山の国なのちりをみちゐ
信濃ゐゐ丙ゐ田ゐ五ゐ案みちゐ
みちゐ毎寒ゐ餅ひ
乾鮭もゐゐもやみち寒五
ゐら鮭や米寒度のよりち刀
ゐちさけやゐゐのゐれて仏
鮭のにゐゐやゐ毎の山庚俵
風呂ゐ文ゐ寒ゐ鮭とし京都ゐ
ゐ山ま寒を代て乾鮭とちゐ
みゐ門や佛乃ゐ庚れまる

みづのや孤村の犬の猫を追ふ
[illegible]や門[illegible]ハ岩の苔
寒月未[illegible]寺の男[illegible]
[illegible]の石[illegible]の苔
[illegible]の[illegible]の梅やみちの角
[illegible]や[illegible]の梅
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]れも
[illegible]の温泉の[illegible]
[illegible]日の[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]や湖[illegible]
[illegible]の枝[illegible]雀の[illegible]

[illegible]寺果[illegible]や[illegible]の涙ひ[illegible]し
[illegible]末の[illegible]や[illegible]れて古[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の表[illegible]
[illegible]の[illegible]や[illegible]
除[illegible]
[illegible]やら[illegible]ん[illegible]ハ[illegible]あ[illegible]の[illegible]

雪ちる日の人東山より今しも雲
村の遠景をうつす書あり画あり
宵像あり色彩もまた香ふかきを
遺稿と題するに字未あらず史堂
の云ふ文章の手紙なりし元
何り拙なる作なるは疑ふ余和すす霧石すを
はち俗書の巻し新に逸句を集
めて此書を成す当稿を上すをた
人の言ふあらはは道と

名ちの子を訪ひて金福寺の塚を
叩けば松風石を年経はすとも書
画是芸村のしのちるを

明治庚子春　月郎

明治三十五年中秋　松園のあらし子